

スキー場及び索道の現況

平成27年3月16日

1. 調査①「スキー場の経営実態に関するアンケート調査」

1-1. 調査概要と主な調査結果

「調査①スキー場の経営実態に関するアンケート調査」調査概要

- 調査目的 : スキー場経営の実態を把握し、課題を抽出するとともに、活性化のための取組みの参考とすること。
- 調査方法 : 郵送調査(往信:郵送、返信:FAX)
- 調査対象 : 全国のスキー場517箇所/有効回収数161票(回答率31.1%)
- 調査期間 : 平成27年2月17日(火)~3月6日(金)
- 調査項目 : スキー場の概況/スキー場の課題認識/スキー場の取組み状況

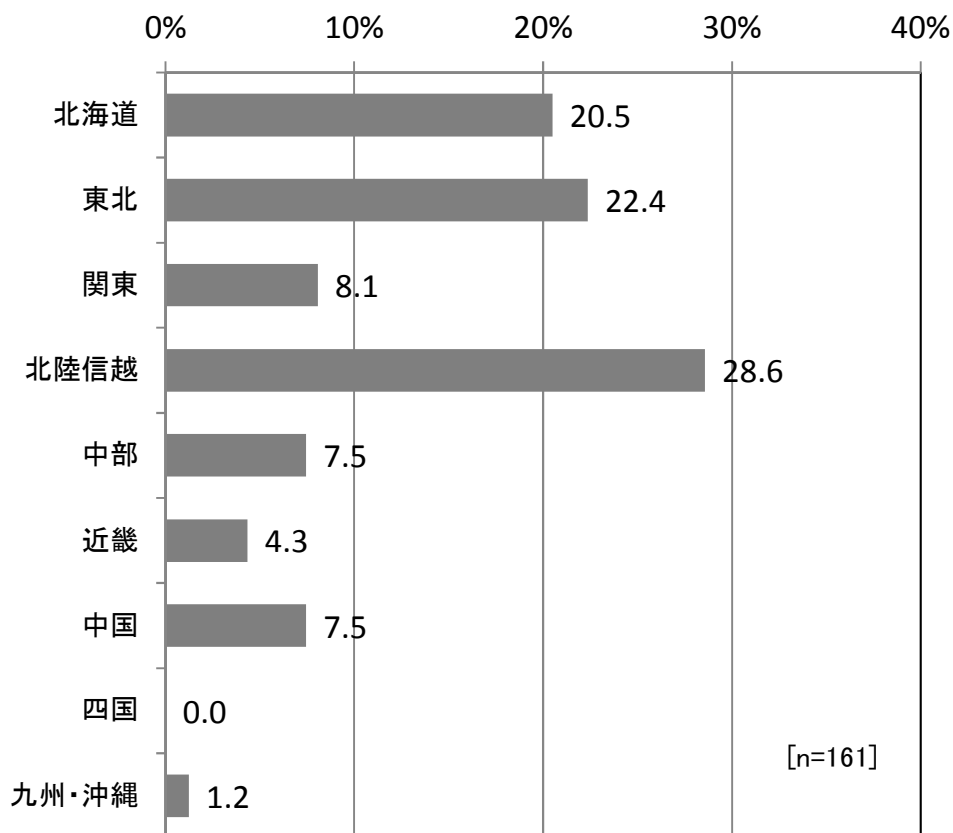
<主な調査結果>

- 地域分布は「北陸信越」28.6%、「東北」22.4%、「北海道」20.5%の順。経営形態は「民間」49.1%、「公営」24.8%、「第三セクター方式」14.9%。
- 来場者数は、昨シーズン(2013-2014年)でみると、“1万人~5万人未満”が37.3%、“5万人~10万人未満”が18.0%、“10万人~20万人未満”が16.8%の順。“1万人未満”のスキー場も1割程度存在。来場者数の最近3年間の推移をみると、“5万人~10万人未満”がやや減少し、“1万人~5万人未満”がやや増加。
- 昨シーズンの来場者内訳をみると、“スキー場のある都道府県内の日本人”が46.9%、“都道府県外の日本人”が47.2%で、日本人は合計94.1%。一方、海外客は、アジア系2.8%、西欧系2.3%、それ以外が0.8%で合計5.9%。
- 都道府県内の来場者のみのスキー場が13%存在する。また、“80%以上が都道府県外”と誘客に成功しているスキー場は13.7%。
- 海外からの来場者がゼロのスキー場が39.8%存在する。海外からの来場者が5%以上のスキー場は16.1%。
- 売上金額は、昨シーズンでみると、“1,000万円~5,000万円未満”が22.4%、“1億円~5億円未満”が17.4%、“100万円~1,000万円未満”が16.1%となった。100万円に満たないスキー場も5.6%存在する。
- 昨シーズンの売上金額の内訳をみると、飲食・宿泊は“100万円未満”が32.3%と多い一方で、“1億円~5億円未満”も8.1%存在。
- 外国人スキー客の消費傾向は、“日本人よりも金額が小さい”は9.3%、“日本人と同程度”が21.6%である一方で、“日本人よりも金額が大きい”は39.2%に達し、18.6%は“日本人の2割以上”と、外国人来場客は日本人客よりも大きな消費金額を見込めることがうかがえる。
- 来場客の特徴は、“日帰り客が多い”が85.1%、“子連れスキー客が多い”が60.2%が目立つ結果となった。
- スキー場や周辺地域の特徴は、“初心者・初級者向けコースが充実”、“雪質が優れている”、“料金が安い・割引や優待が充実”が上位。
- バックカントリーを滑ることに関し、「需要がある」と回答したスキー場は4分の1強程度(28.6%)で、6割弱は「需要がない」と回答。
- パウダースノーが「魅力になっている」と回答したスキー場は6割強(62.1%)。「魅力になっていない」と回答したスキー場は2割程度(21.8%)。
- 経営課題として、「重要である」のスコアが高い項目は、“施設の老朽化対策”、“安全管理体制の整備・運用”、“人材の確保”、“新規参加(未経験者)の促進”等が上位。一方で、“人材の確保”は7割が「取り組んでいるが、成果が出ていない」と回答。また、インバウンド対応の“海外へのスキー場のPR・魅力発信”、“外国人客の受入環境整備”等は6割が取組自体ができていない状況。

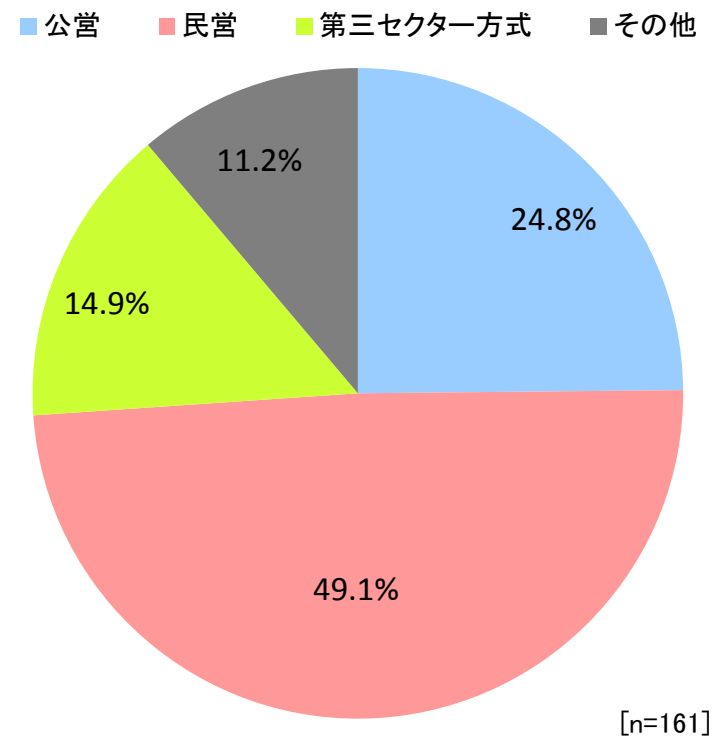
1-1. 回答者属性

○地域分布は、北陸信越28.6%、東北22.4%、北海道20.5%の順となった。
 ○経営形態は、民間49.1%、公営24.8%、第三セクター方式14.9%となった。

スキー場の地域【単一選択】



問1. スキー場の経営形態【単一選択】



東北: 青森県 岩手県 宮城県 秋田県 山形県 福島県
 関東: 茨城県 栃木県 群馬県 埼玉県 千葉県 東京都 神奈川県
 北陸信越: 新潟県 富山県 石川県 長野県
 中部: 福井県 静岡県 愛知県 三重県
 近畿: 滋賀県 京都府 大阪府 兵庫県 奈良県 和歌山県

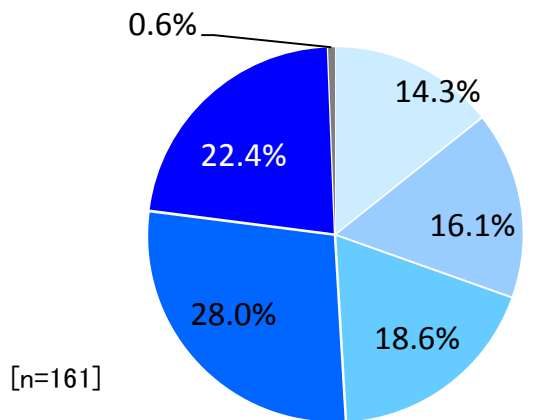
<その他>
 ○指定管理者
 ○一部公営、一部民間

1-1. 回答者属性

○スキー場のその他の属性データは以下の通り。

問2. スキー場のコース数【数量】

1~2本 3本 4~5本 6~9本 10本以上 不明

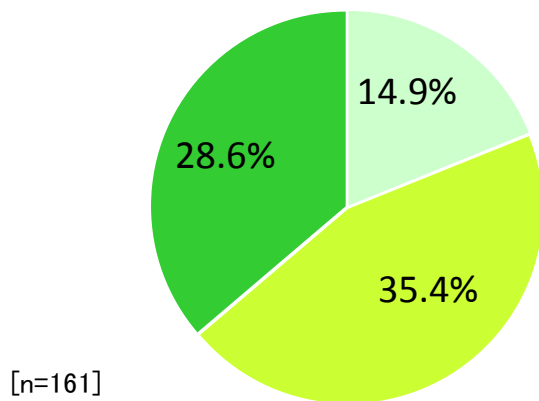


[n=161]

(平均)7.89本

問2. スキー場の総面積【数量】

~10ha未満 10~50ha未満 50ha以上

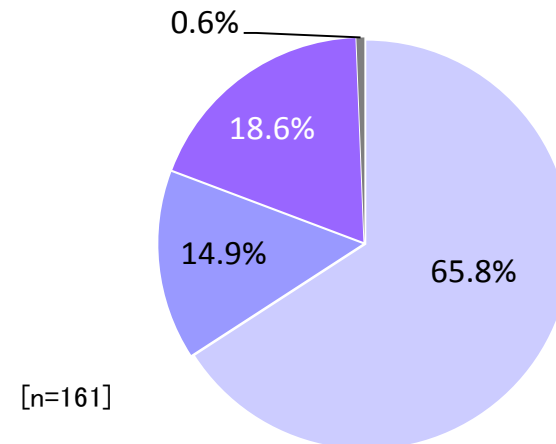


[n=161]

(平均)60.43ha

問3. 人工降雪機の数【数量】

0台 1台~10台未満 10台以上 不明

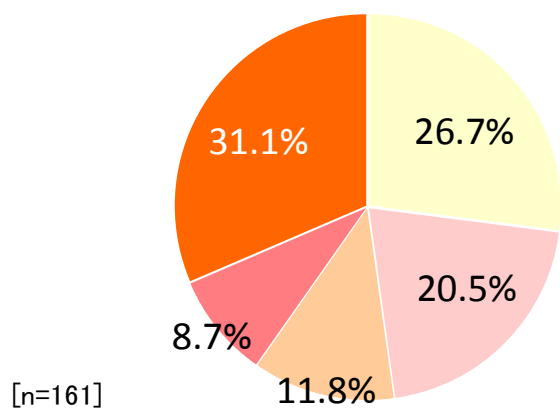


[n=161]

(平均)9.93台

問2. スキー場のリフト数【数量】

1基 2基 3基 4基 5基以上

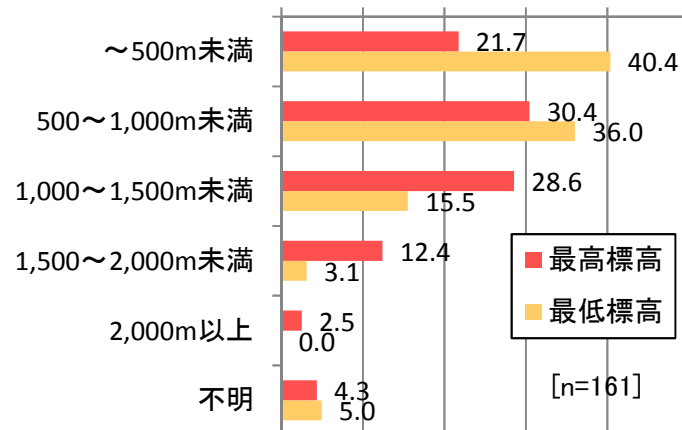


[n=161]

(平均)4.03基

問2. スキー場の標高【数量】

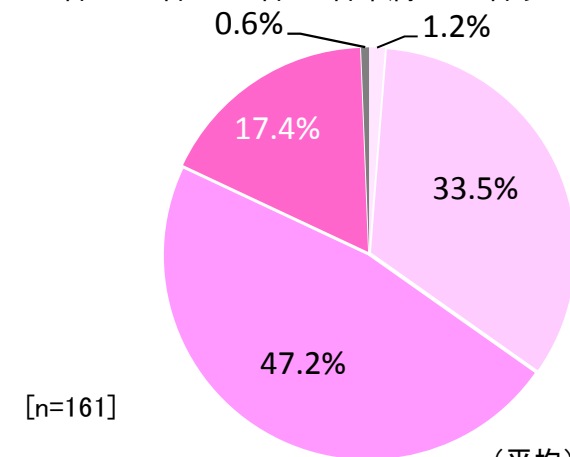
0% 10% 20% 30% 40% 50%



[n=161]

問3. 圧雪車の数【数量】

0台 1台 2台~5台未満 5台以上 不明



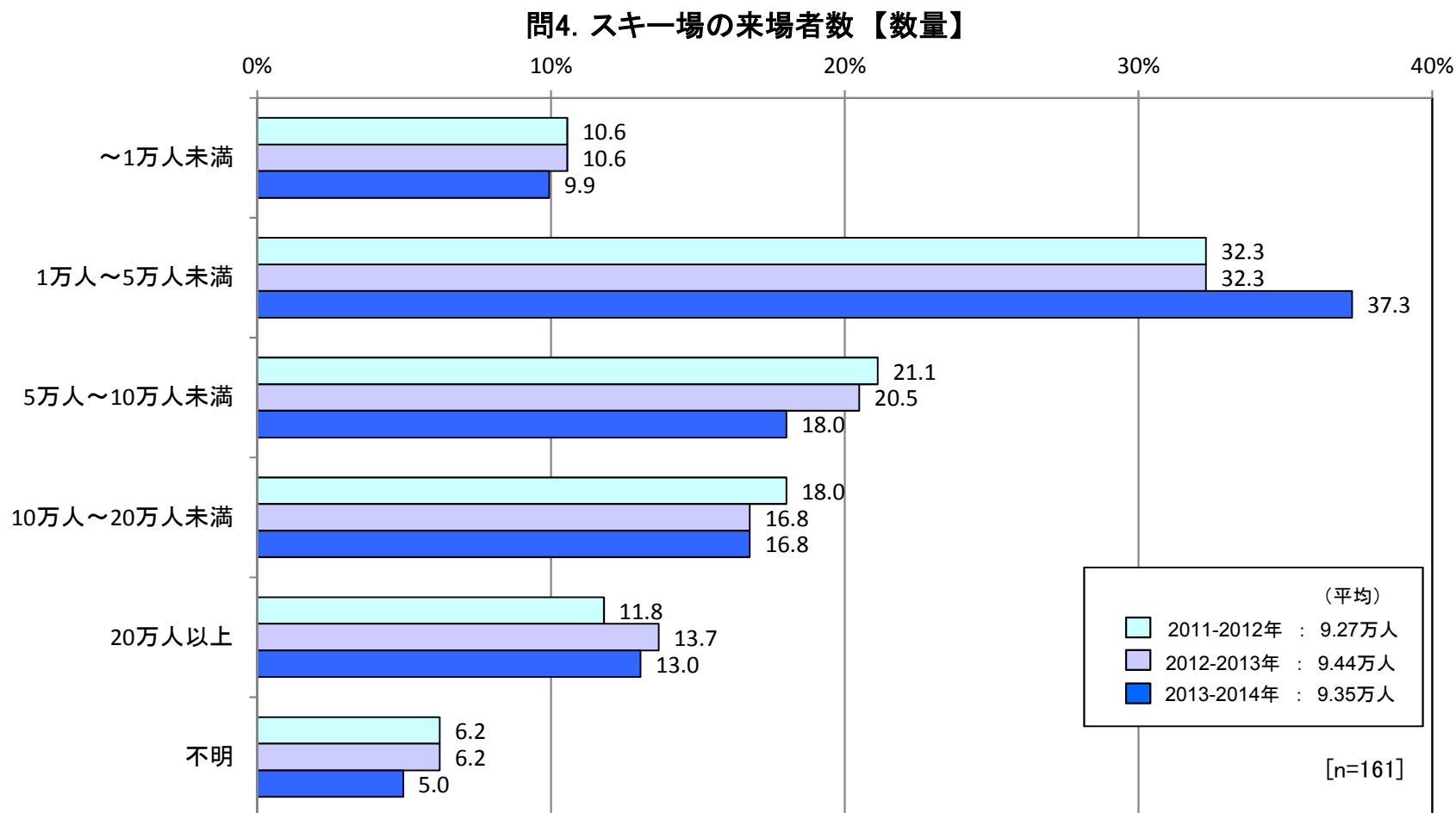
[n=161]

(平均)2.96台

1-2. スキー場の来場者数(最近3年間)

○昨年度でみると、1万人～5万人未満が37.3%、5万人～10万人未満が18.0%、10万人～20万人未満が16.8%の順となった。1万人未満のスキー場も1割程度存在している。

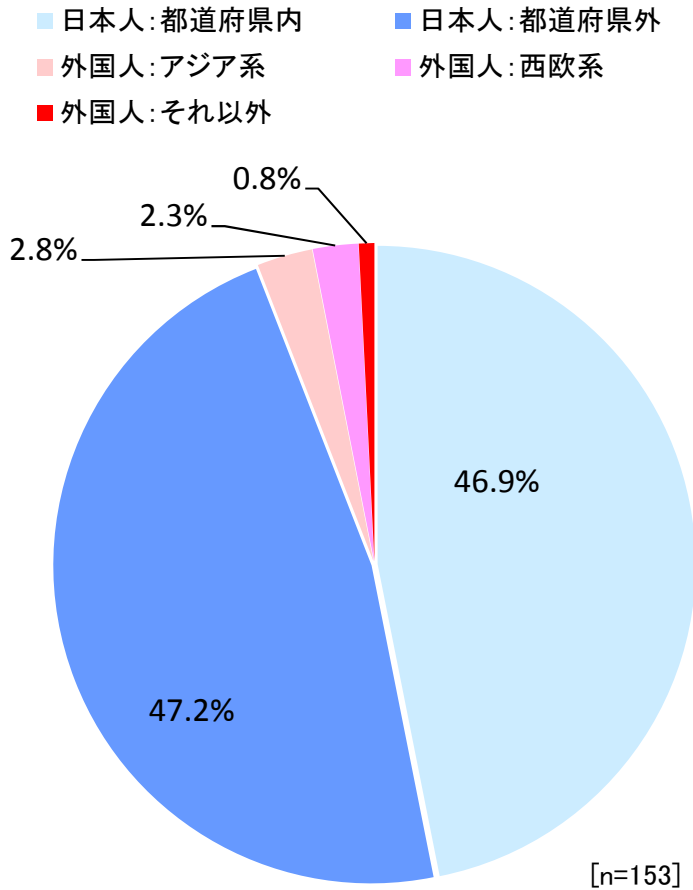
○3年間の推移をみると、5万人～10万人未満がやや減少し、1万人～5万人未満がやや増加している。



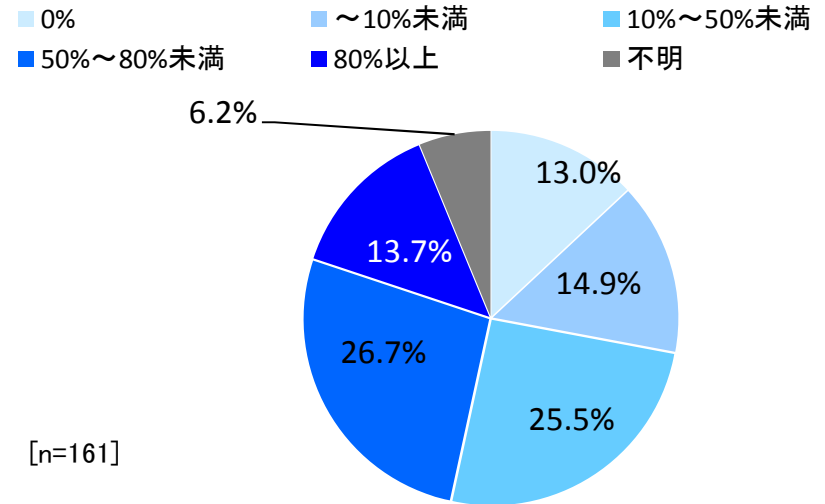
1-3. スキー場の来場者の内訳(2013-2014年シーズン)

○昨年度の来場者内訳をみると、都道府県内の日本人が46.9%、都道府県外の日本人が47.2%で、日本人は合計94.1%。海外客はアジア系2.8%、西欧系2.3%、それ以外が0.8%で合計5.9%。
 ○都道府県内からの来場者のみのスキー場が13%存在。80%以上が都道府県外は13.7%。
 ○海外からの来場者がゼロのスキー場が39.8%。5%以上のスキー場は16.1%。

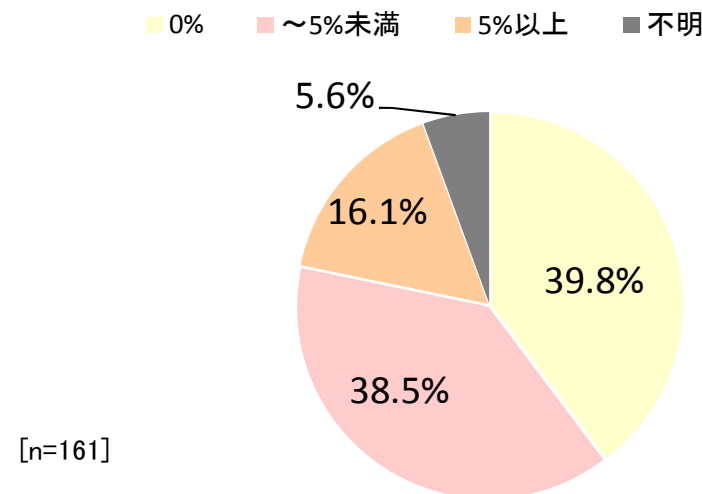
問5. 来場者の内訳【数量】



問5. 都道府県外からの来場者が占める割合の分布



問5. 海外からの来場者が占める割合の分布

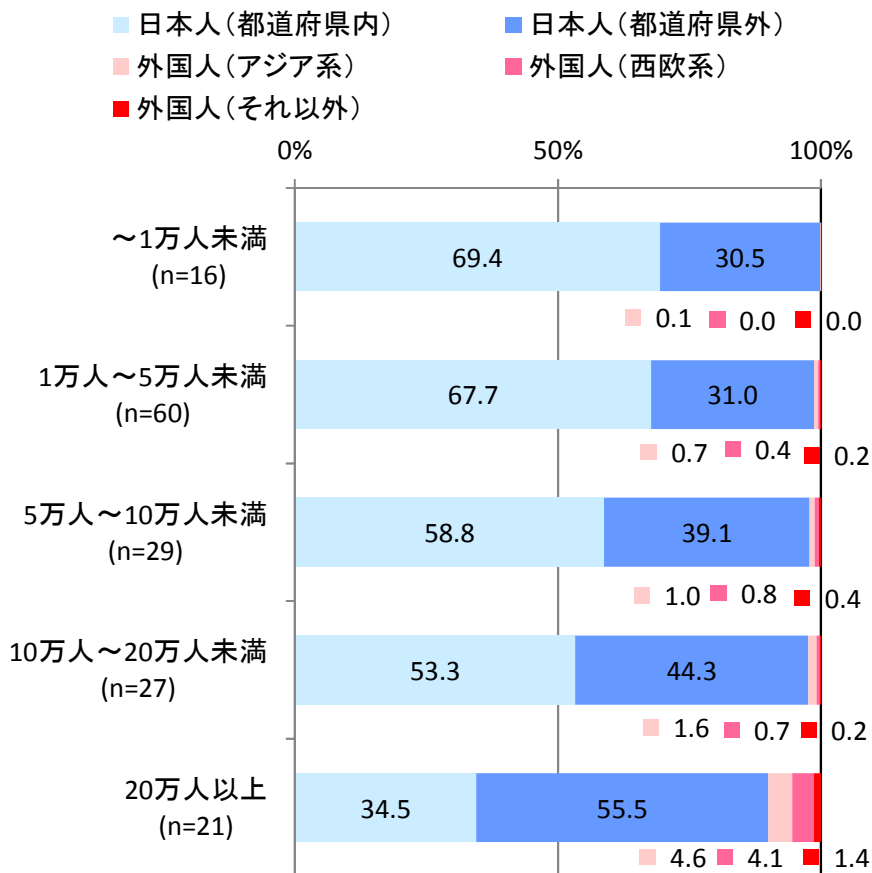


1-3. スキー場の来場者の内訳(2013-2014年シーズン)

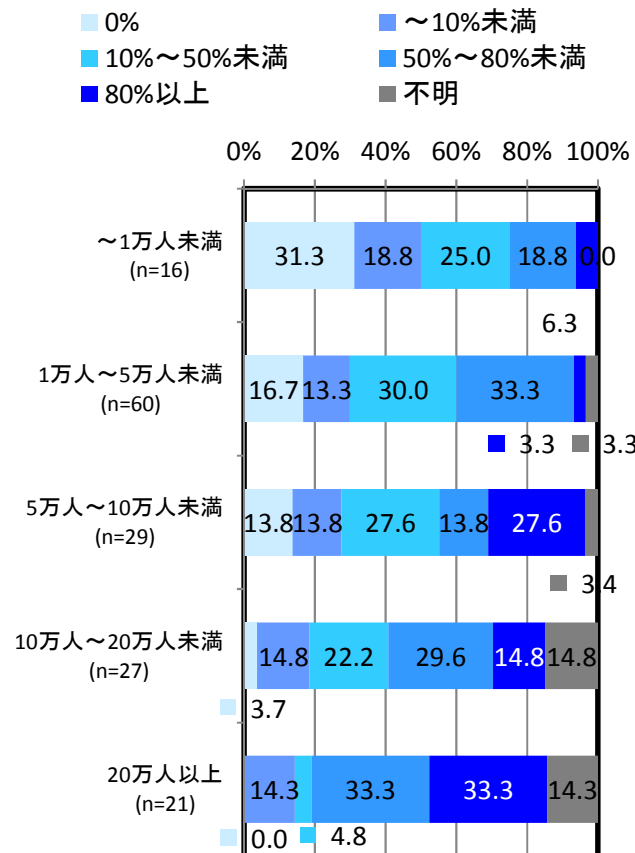
○来場者の内訳を来場客数別にみると、規模が大きくなるほど、県外比率及び海外比率が大きくなる傾向にある。

○同様に、都道府県外からの来場者が占める割合、海外からの来場者が占める割合を来場客数別にみると、規模が大きくなるほど、それぞれの比率が大きくなる傾向にある。

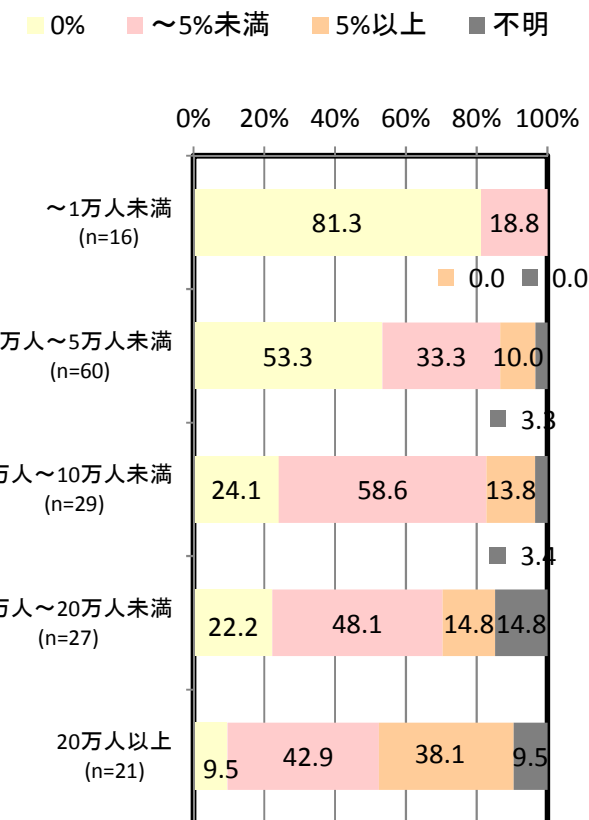
問5. 来場者の内訳【数量】



問5. 都道府県外からの来場者が占める割合の分布



問5. 海外からの来場者が占める割合の分布

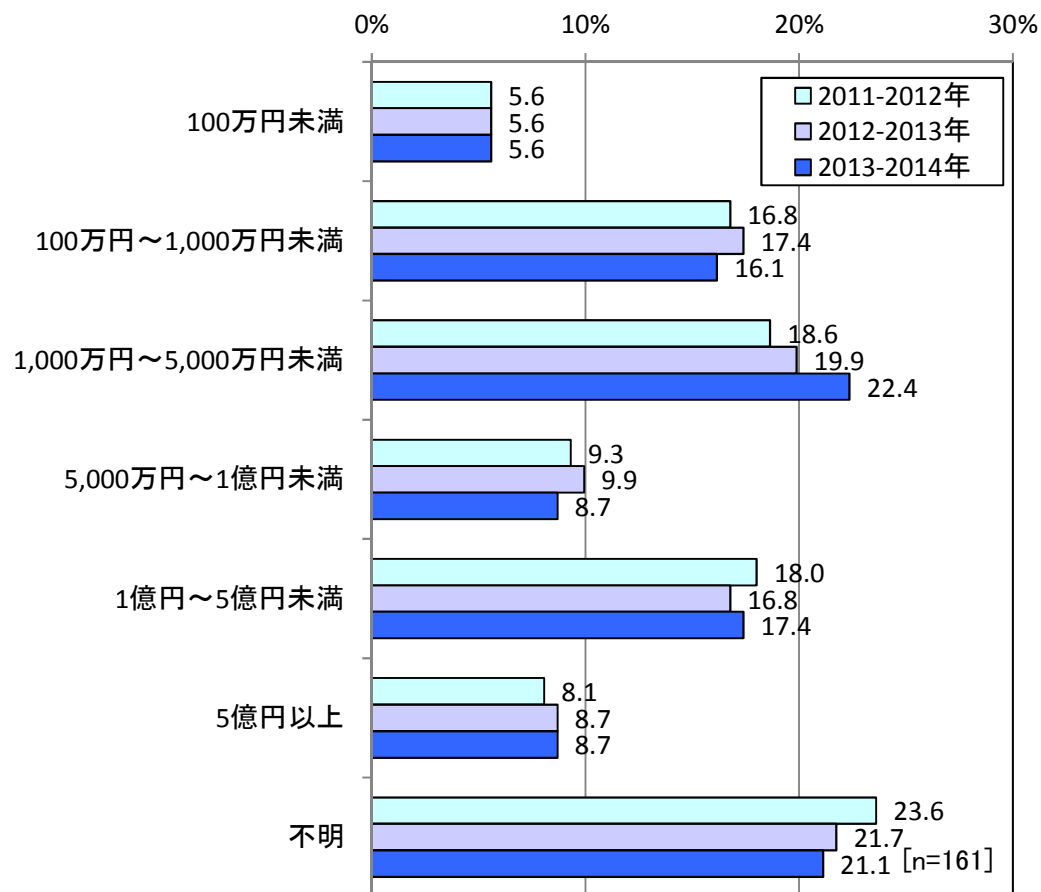


1-4. スキー場の売上金額(最近3年間)

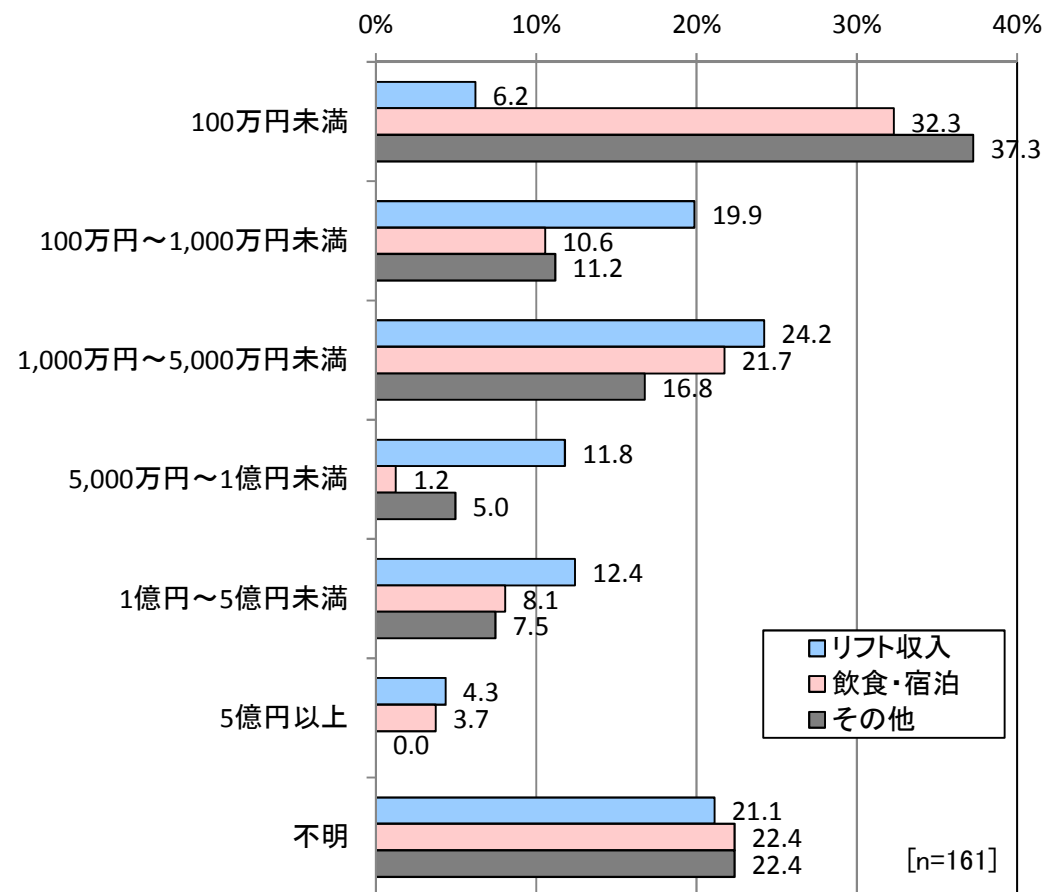
○昨年度でみると、スキー場の売上金額は、1,000万円～5,000万円未満が22.4%、1億円～5億円未満が17.4%、100万円～1,000万円未満が16.1%となった。100万円に満たないスキー場も5.6%存在する。3年間の推移をみると、1,000万円～5,000万円未満がやや増加している。

○昨年度の内訳をみると、飲食・宿泊は100万円未満が32.3%と多い一方で、1億円～5億円未満も8.1%存在している。

問6. 売上金額(合計)【数量】



問6. 売上金額(2013-2014年シーズンの内訳別)【数量】



1-5. 外国人来場客の消費傾向

○日本人スキー客の消費金額を100%とした場合、外国人スキー客の消費金額をたずねた結果、「日本人よりも金額が小さい」(100%未満)が9.3%、「日本人と同程度」(100%)が21.6%、「日本人よりも金額が大きい」(100%超)が39.2%に達した。そのうち、「2割増以上」(120%以上)が18.6%と、外国人来場客はより大きな消費を見込めることがうかがえる。

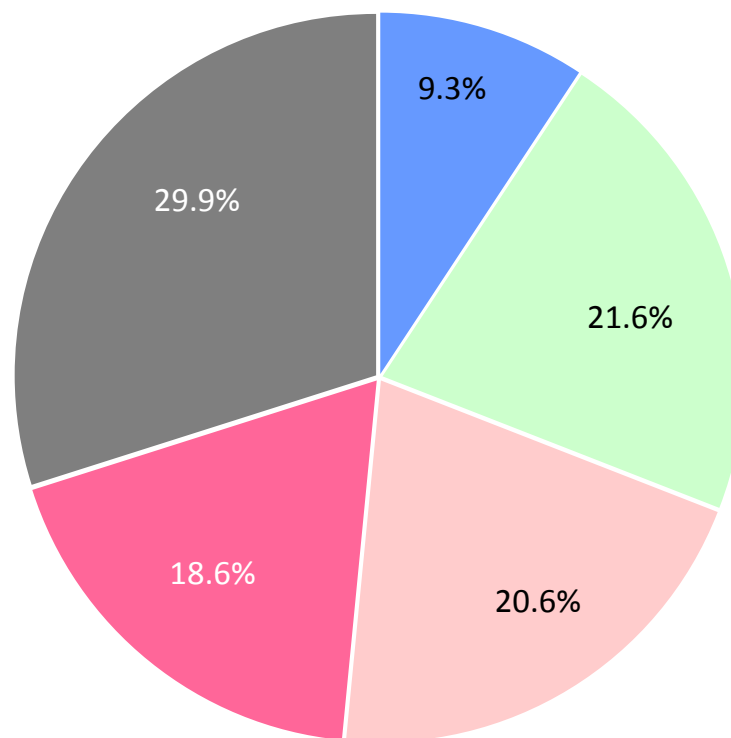
問7. 外国人来場客の消費傾向

■ ~100%未満 ■ 100% ■ ~120%未満 ■ 120%以上 ■ 不明

日本人より
小さい

日本人と同程度

日本人より大きい

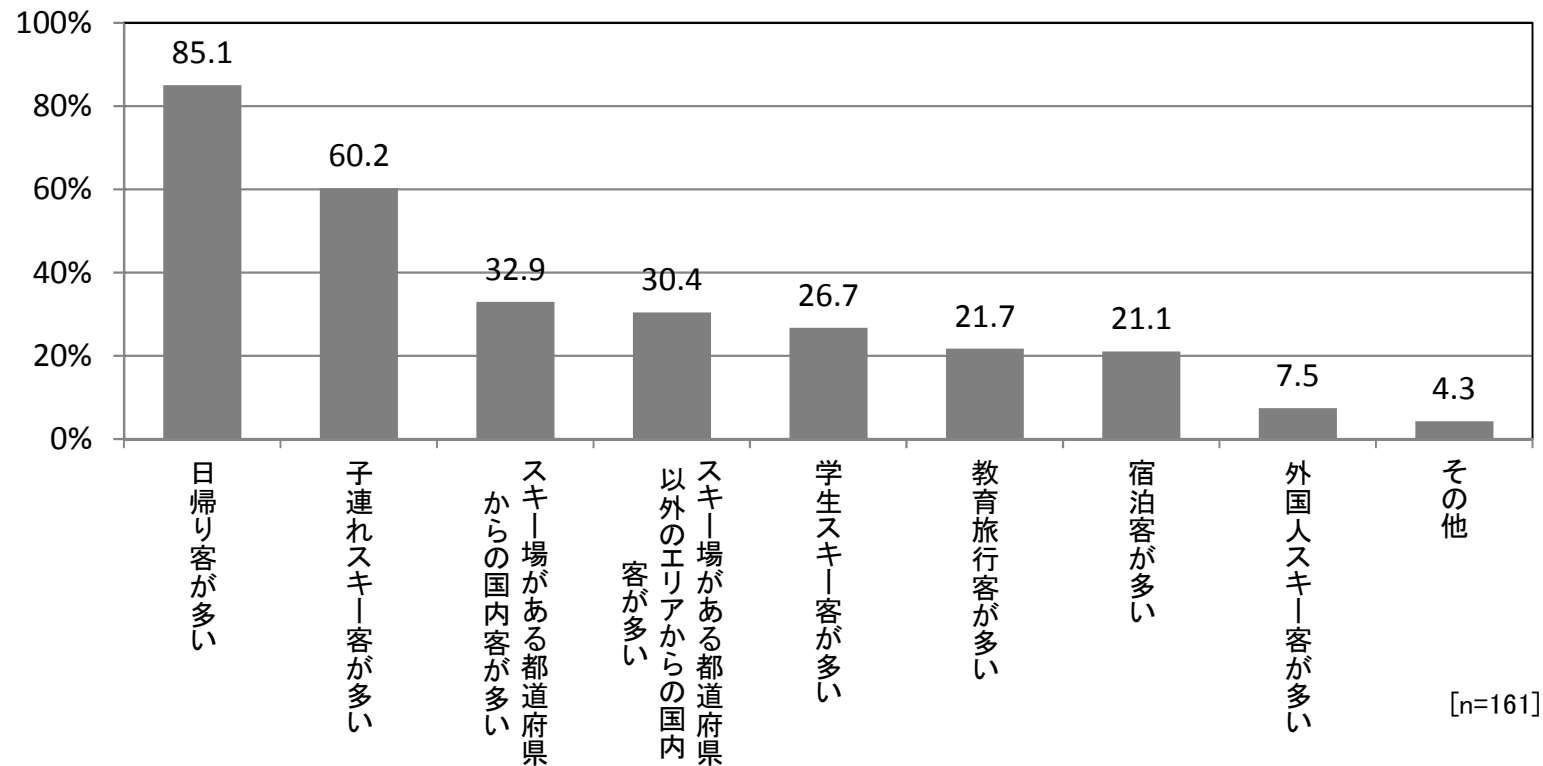


[n=97]

1-6. スキー場の来場客の特徴

○スキー場の来場客の特徴は、「日帰り客が多い」85.1%、「子連れスキー客が多い」60.2%、「スキー場がある都道府県からの国内客が多い」が32.9%の順となった。

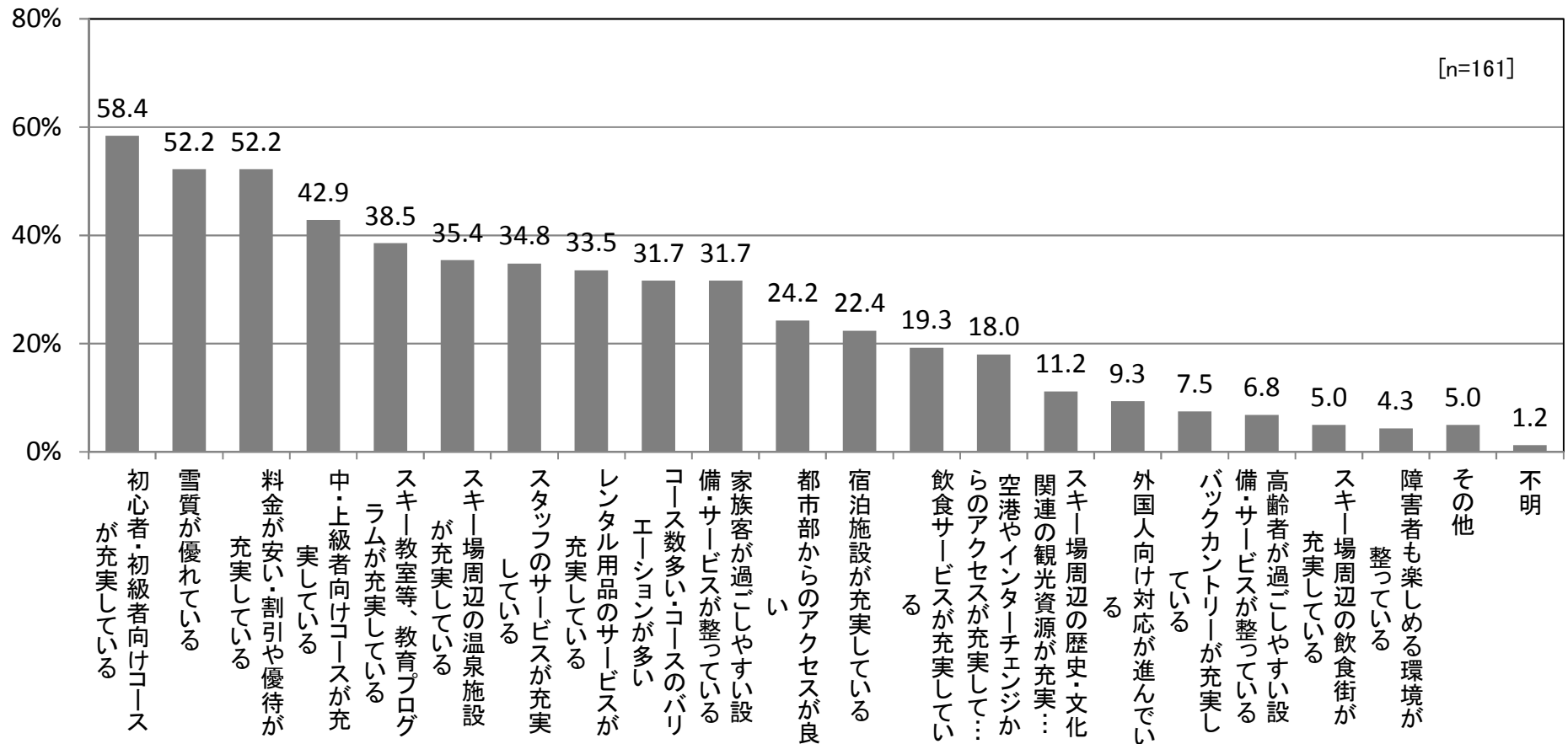
問8. スキー場の来場客の特徴【複数選択】



1-7. スキー場や周辺地域の特徴

○「初心者・初級者向けコースが充実」58.4%、「雪質が優れている」、「料金が安い・割引や優待が充実」52.2%、「中・上級者向けコースが充実」42.9%の順となった。

問10. スキー場や周辺地域の特徴【複数選択】

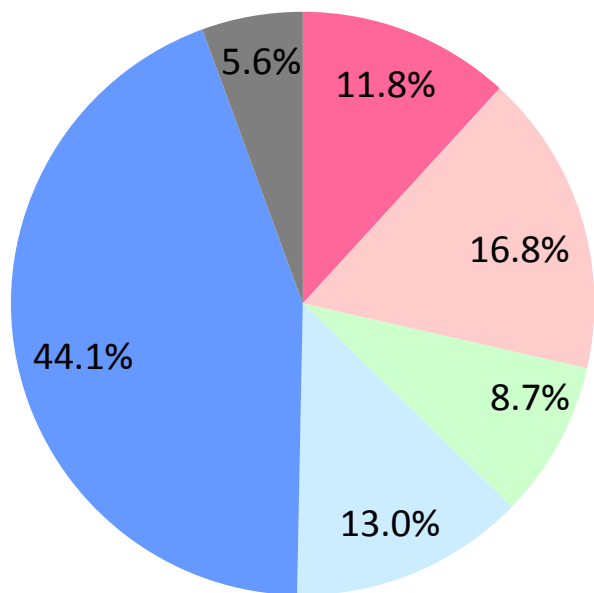


1-8. バックカントリー需要 / パウダースノーの魅力度

○バックカントリーを自由に滑ることに対しては、28.6%が「需要がある」(「非常に」+「やや」)と回答した。一方、「需要がない」(「あまり」+「ほとんど」)は57.1%に達した。
 ○パウダースノーは、62.1%が「魅力になっていると思う」(「非常に」+「やや」)と回答した。一方、「魅力になっていない」(「あまり」+「ほとんど」)は21.8%にとどまった。

問9. バックカントリー需要の有無【単一選択】

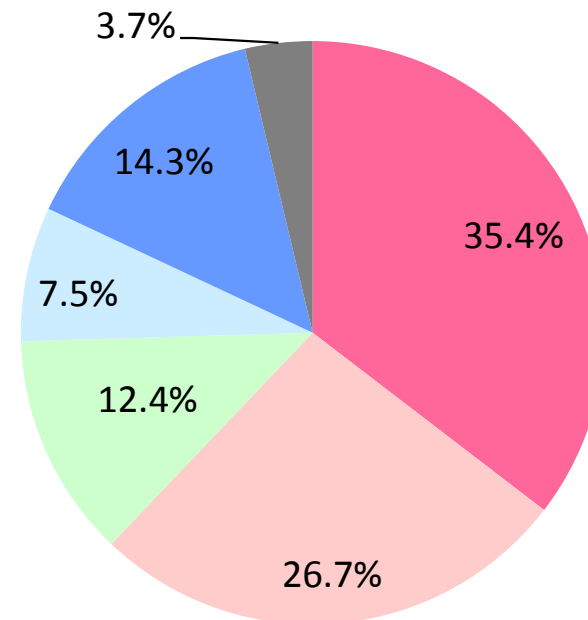
- 非常に需要がある
- やや需要がある
- どちらともいえない
- あまり需要がない
- ほとんど需要がない
- 不明



[n=161]

問11. パウダースノーの魅力度【単一選択】

- 非常に魅力になっていると思う
- やや魅力になっていると思う
- どちらともいえない
- あまり魅力になっていないと思う
- ほとんど魅力になっていないと思う
- 不明

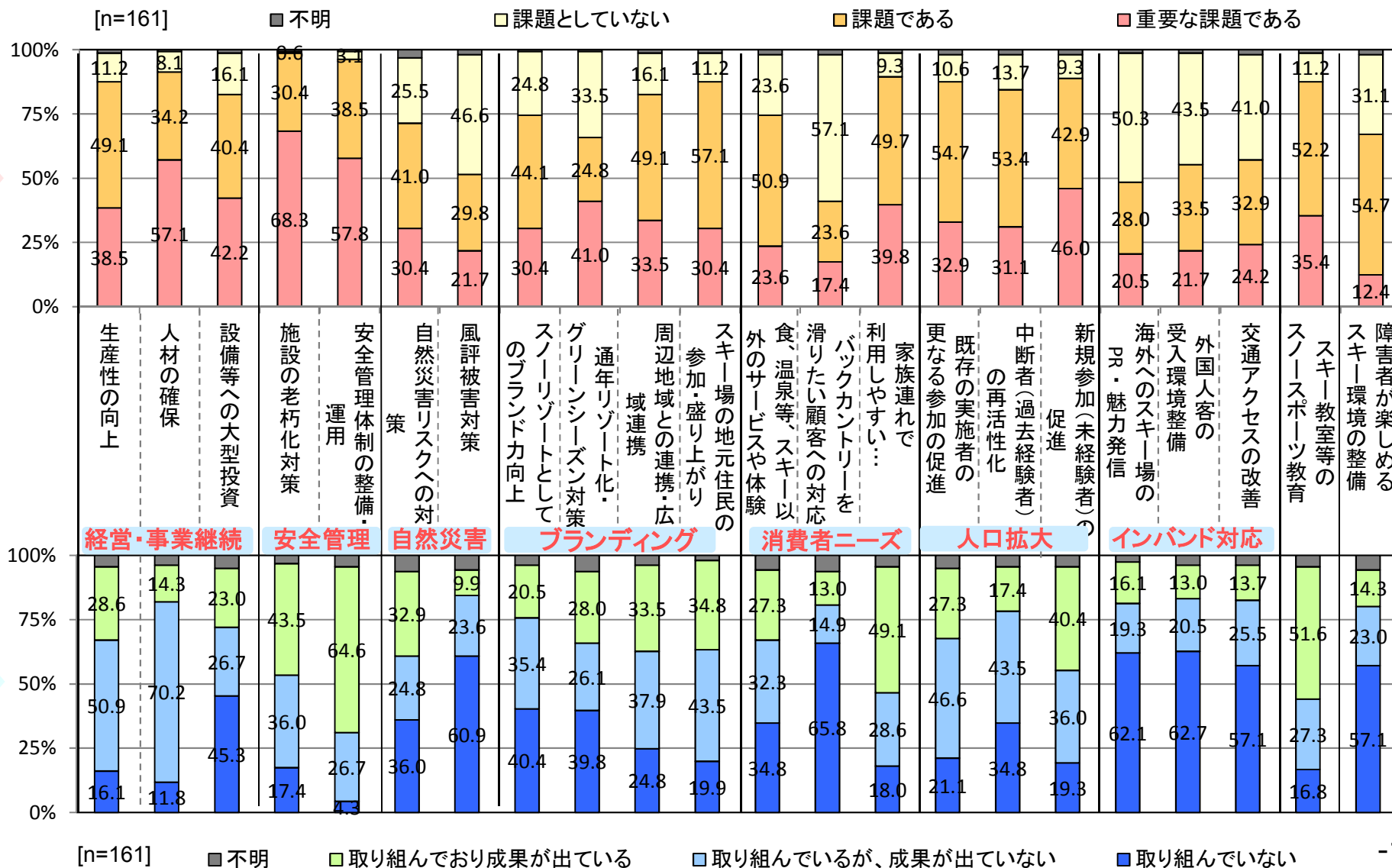


[n=161]

1-9. スキー場の経営課題の認識と取組み状況

○「施設の老朽化対策」、「安全管理体制の整備・運用」、「人材の確保」が重要な課題の上位。
 ○「人材の確保」は“取り組んでいるが、成果が出ていない”が7割に達する。インバウンド対応の「海外へのPR・魅力発信」「外国人客の受入環境整備」等は6割が取組み自体できていない。

課題認識



2. 調査②「索道調査」

「調査②索道調査」調査概要

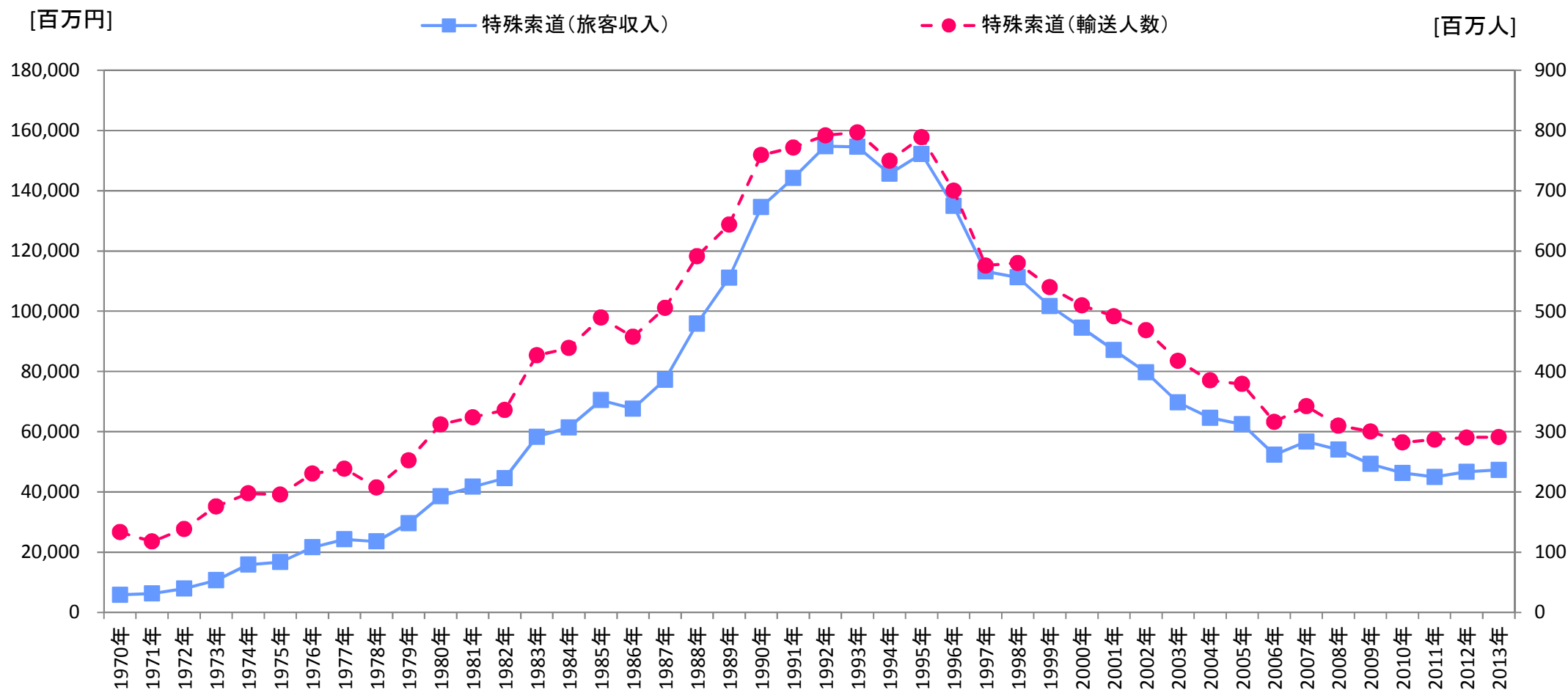
- 調査目的： 索道実績のデータを地域ブロック別に分析し、地域別の索道の状況を把握すること。
- 対象データ： 「鉄道輸送統計年報」に掲載されている昭和45年（1970年）から平成25年（2013年）までの特殊索道の実績データ（売上、人数）。
- 分析内容： 特殊索道の実績データについて、全国9ブロック別に時系列データを整理する。

<主な調査結果>

- 「鉄道統計年報」によると、特殊索道については、旅客収入、輸送人数ともに、1992年～1995年をピークとし、それ以降は減少傾向。一方で、この2年間は横ばい～上昇傾向で、急激な減少から回復基調との見方もある。
- 地域ブロック別に特殊索道の実績データをみると、「北陸信越」が特に大きく、全国合計と同様に、1995年以降大きく減少していることがわかる。

2-2. 特殊索道実績の推移(全国合計) *再掲

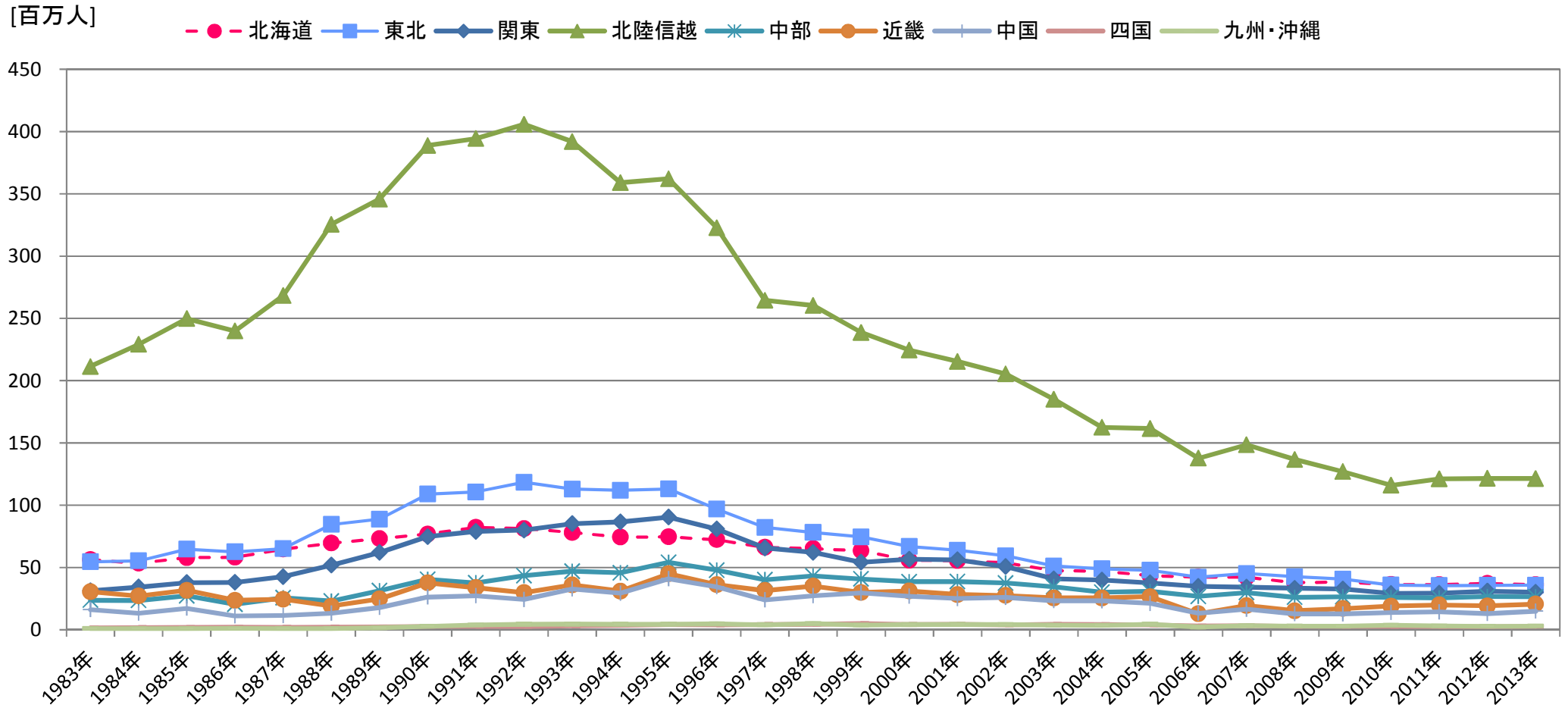
○「鉄道統計年報」によると、特殊索道については、旅客収入、輸送人数ともに、1992年～1995年をピークとし、それ以降は減少傾向。
 ○一方で、この2年間は横ばい～上昇傾向で、急激な減少から回復基調との見方もある。



[出典:「鉄道統計年報」(国土交通省)]

2-3. 特殊索道実績(人数)の推移(地域別)

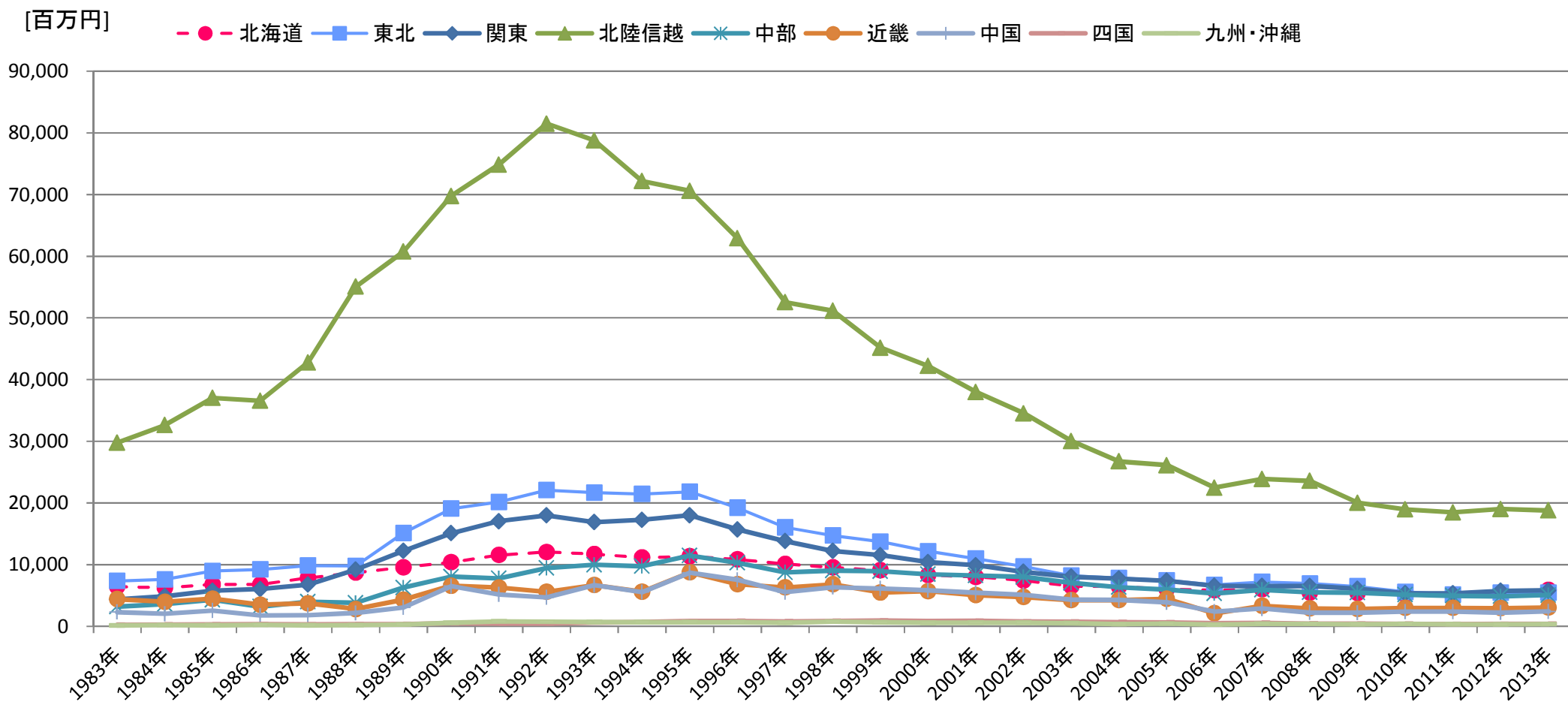
○地域ブロック別にみると、「北陸信越」が特に大きく、全国合計と同様に、1995年以降大きく減少していることがわかる。



[出典:「鉄道統計年報」(国土交通省)]

2-4. 特殊索道実績(売上)の推移(地域別)

○地域別の売上の推移は、人数の推移と同様の傾向。



[出典:「鉄道統計年報」(国土交通省)]